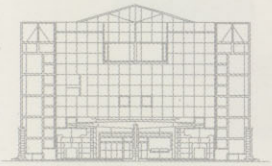
The Membership of the National Museum of Modern Art, Kyoto



京都国立近代美術館 友の会会報

2006
SUMMER
第10号

富本憲吉　磁器色絵金彩染付「竹林月夜」模様大陶板　1958年

展覧会の見どころ

生誕120年—富本憲吉展

8月1日[火]—9月10日[日]
毎月曜日休館、金曜日は午後8時まで夜間開館
(入場は午後7時30分まで)

富本憲吉のことば抄

十一月一日、農夫等はこごみて金色なる稲を刈る。女等は村端れに車を置く小商人と高らかに談ず。授乳のままに立ちて見るあり。鳥は青空を静かに舞ひ、金剛山に白雲飛ぶ。此の時この光景のうちにわれは陶土を水干せむとて土をゆる。麗しくも豊かなる景色なるかな。(大正4年、富本は故郷奈良県生駒郡安堵村に初めて窯を築いた。)

花の香ひ、そは焼かれたる壺にさす光なり。

蛇足——陶器を焼くにも此の語の適切なるを感ずる事あり。

馬鈴薯の花の天地人にて生花されたるいたましきかな。

舊(ふる)時計のにぶく遅き歯車の音。鶏頭花の壺に挿されて静かなる赤き色。まづしくあれど此の室もの思ふによし。

なるべく安価にして模様なき只温き衣を幼児に買ふとて我等思ひまどふ。安価なるを望むは貧しき故にして、模様無からむと望むは日常模様を以て座右を廻らす我等がその模様の凡てを好まざればなり。

私は私自身の模様を見る時以下の事を念として取捨する。模様から模様を造らなかったか、立派な古い模様を踏台として自分の模様を造りその踏台を人知れずなげ散らしてさも自分自身で創めた如く装うては居ぬか。假令野山を馳せ廻って造られたものでも、假令自分ひとりにだけ知れて居て他の人には未だ解って居ない様なものでも、或は一部の改作だけでひどく良いものが出来た場合でも、私は思ひきってその原稿を捨てる。(大正4年)

「模様より模様を造る可からず。」
　此の句のためにわれは暑き日、寒き夕暮れ、大和川のほとりを、東に西に歩みつかれたるを記憶す。

寝台を青磁で焼く事を命じられた景徳鎮の工人が幾ら焼いてもそんな大きいものが焼けないので幾たびも失敗の後しまいに燃えさかる窯に身を投げて死むだといふ話を読むだ時私はそれを信ずることが出来なかった。その後青磁について又轆轤を使はない素地の焼きにくい事について幾度もの失敗を重ねた結果今は信じることが出来るやうになった。

(前数行省略) 今われわれが日常使用する飯茶碗それらは私共の眼から見て普通陶器店で買ふのに苦しむくらい厭なものが多い。然し英仏製の肉皿に比較してどちらを好むかと言はれるなら、私はその飯茶碗を取りたい。その飯茶碗に使用された呉州にも模様にも素地にも亦造る人の考へにも一点のとる可き点がない。しかしそれには未だ美しかった先の時代の影だけの美しさを認めることが出来る。肉皿に於いては変化ない線、面、それにはただ味はふ可き奥行きも余情も亦造った人の考へ、そんなものが一つも見えない。それには人の買ふ程度で実用になるものを一つでも数多く製造しようとする商業主義の発露があるばかりではないか。

去年夏大和川のいつも自分が坐る釣場で竿の先ばかり見とれていると急に雨がやって来た。雨具を持たない自分は腰を曲げ膝を抱いて雨の濡らすに任せて下流を見た。そこには近年かけられた低いコンクリートの橋があり堤の大通りから橋におりる曲がった坂道がある。竹藪がその道をおほい被せる様に茂り合ひ竹藪の向ふに一つの納屋が見える。腹が濡れる迄は釣らうと決心した自分は首をあげてその景色にみとれながら白い水煙をあげて過ぎ行く雨を見、また竿の先に注意をかへしつつ半時ばかりを過ごした。この時出来上がったものが「大和川急雨」と云ふ大皿につける模様として出来上がったものである。

開窯
開窯の結果一にかかって我等五人の親子が生活の資たり。結果よき時はあたり前なりと思ひ、悪しき時は先づそ

美心短信

富本憲吉の四弁花模様

テイカカズラの花

大正４年、「模様から模様を作らない」と決心した富本は、大和の自宅の周辺の風景や、垣根や野山に生える植物を丹念に写生して、そこから図案を考案した。中でも、色絵金彩や金銀彩の作品に多く使われたのが、羊歯模様と四弁花模様であった。富本はこれらを「更紗模様」と呼んだが、羊歯模様はシダの若芽が徐々に開いてゆく様を図案化したもの。四弁花は東京祖師ケ谷の自宅玄関の袖垣に植えたテイカカヅラの花を、写生し、図案化したものである。実際は五弁の花だが、連続模様の場合は描くのが不便なため、四弁にしたという。径が１センチにも満たない小さな花だが、香りが高く、しかも奢らず可憐で、初夏の垣根などに這い登って咲いているのが見られる。白花で花弁が夾竹桃のように少し捩れているのが特徴である。写真は京阪三条の、鴨川沿の植え込みに咲いていたものの一枝。

（前頁から続く）

の金銭の損失を如何にして補給す可きやを思ひ煩ふ。未だ熱ある窯に栗、銀杏など焼きて子供等と楽しむ。追ひせまる実生活の苦しみを暫し忘るる開窯の余技なり。

棚に置きて眺む

花をさす為の白磁中壺、左に旧作染附水滴、右に明朝染附香炉残缺、庭より切り取りたる山百合の一輪をさして眺め入る。古きものに比して如何、現代に造られたるものとして如何。胴よく豊かに、釉光沈みてささされたる花ともよく、いささか固きに傾く嫌ひありて烈しくいそがしき現代に遠し。

白磁の壺

壺を見る上で最も肝要なことは、その壺の形であり、釉や模様は本体である形の上を飾るに過ぎない。釉も模様も、美しさをつくりあげる上で随分重い役目を果たしていることは勿論のことであるが、形はその根元となり、立体である壺としての生命の源泉である。

形は轆轤の技術によって生まれるといふ事は誰も知っている事であるが、その主要な形を産み出す轆轤を、平面でしか表現できない現寸切断図によって、轆轤師と呼ばれる職人の手に任せて置いて充分なりとする陶器家のあることを、余り知る人が無いのは私のいつも残念に思っていることである。縮尺で現れた小さい壺を、大きく造り直してさへ同じ感じが出ない。即ち立体は尺度の変更だけでもすでに感じを異なるものにしている。まして平面で現された切断面が、立体の壺を現せる道理がないではないか。私はこの理由で、下手ながら轆轤は必ず自分でひくことにしている。

模様や色で飾られた衣服を脱ぎ捨て、裸形になった人体の美しさは人皆知る処であらう。恰度白磁の壺は飾りである模様を取り去り、多くの粉飾をのぞきとった最も簡単な、人で言へば裸形でその美しさを示すものと言へよう。

或ば最も表象的な人体の一部とも言へる。そこには眼をひき思ひをまどはせる何物もなく、ふくらみと凹みが造る柔らかく強い影があり、陶器を工芸的な点から眺めても、ただ観賞するところからみても、最高級のものに思へる。

白磁の壺に花を挿してみよう。花の美しさをそのまま生かすもの、これに比するものを私は知らない。深い処に静寂をたたへ、美しさはひそやかに、恰もよき香りをもつ花のつつましく匂ふ如き感じをもつ。

私は白磁の壺を最も好んでいる。さうしてこの壺こそ、作者が轆轤を廻さねば到底つくりあげることの出来ないほど直接的なものだと思っている。

高原の薊は平地の薊の様に春秋二度咲かず、八月中旬その初花をつけ九月中旬降霜迄短期間に咲き切り、大急ぎで種子を飛ばせ、はげしき冬の寒さを一本の太くたくましき根に全生命を托して来る夏を待つ。
私はこの薊が好きで何度か写生帖を此の花に開いた。

コレクション・ギャラリーの小企画

視て、考えて…、私が見つける美術のセカイ II-Collection on Demand/ あなただけのコレクション
2006年8月8日(火)～9月10日(日)

今年から本格的に活動をはじめました学習支援係は「視て、考えて…、私が見つける美術のセカイ I」(2006年4月7日～5月21日)の第2弾として、来館者の方々の「これが見たい!」と思う作品を募集し、リクエストのあった作品を展示いたします。募集は当館のホームページと館内での案内で行いました。

私が理想とする美術館の姿の一つに、一人一人の鑑賞者と作品とが親密に語り合う場を提供することがあります。多くの方が来館される美術館で、一人のためだけに作品を展示することは無理なのでしょうか…? 私なりにこの疑問に挑戦してみました。本来、美術館は鑑賞者のものであり、学芸員が一方的に展示を作り上げるのではなく、鑑賞者との対話によって視方、愉しみ方を知ることができれば、と思います。

今回応募をいただいた作品のひとつに、土田麦僊(1887-1936)の《大原女》(1927)があります。リクエストを受けて、日本画のコーナーに《大原女》を含む土田麦僊の作品を麦僊特集として展示することにしました。この機会に当館のコレクションをもっと身近に感じていただき、作品の視方や愉しみ方をほかの鑑賞者のみなさまにもお伝えすることができればと思います。土田麦僊特集へと拡がった「私が見つける美術のセカイII」を、是非ご覧ください。　(学習支援係 鎌田智子)

友の会の催し

〈催しのご報告〉
芸大生によるサマーナイト・コンサート

藤田嗣治展の開催に因んで開かれた今回のコンサートは、大変な盛況で、美術館のロビーを聴衆が埋め尽くしました。美術館友の会主催のコンサートという企画は、珍しいことではなく、また、京都では各寺院などもユニークなコンサートを開いていますので、さまざまなコンサートを廻って来られる聴衆も多いのでしょう。この機会を大いに利用していただくと共に、当館の「友の会」も是非ご支援下さい。友の会の方々のご支援こそコンサートの力となるからです。つまり、ご入会をおねがいしたいのです。

今年度のコンサートは12月23日(土)のクリスマス・コンサートと、新年早々1月13日(土)のニューイヤー・コンサートが予定されています。秋は展覧会の都合により開催しません。

春の友の会バス・ツアー

5月14日(土)、滋賀県立近代美術館の「川端龍子展」の見学を中心に、湖東三山を巡りました。「川端龍子展」では事前に懇切な講話をいただき、龍子の主張した大画面の「会場芸術」を存分に楽しむことができました。また、湖東三山では、西明寺、金剛輪寺、百済寺と、それぞれの重厚な古刹のたたづまいを、輝くような新緑の中に見ることができましたが、石段の長さにはいささか閉口しました。

滋賀県立近代美術館にて

● 開館時間
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
● 夜間開館
4月15日(金)―9月8日(金)までの企画展開催中の金曜日
午前9時30分～午後8時まで(入館は午後7時30分まで)
● 休館日
毎週月曜日(月曜日が祭日または公休日に当たる場合は、翌日が休館)、及び年末年始
(開館時間、休館日が臨時に変更される場合があります)

※お車でお越しの場合　**岡崎公園駐車場(地下)**をご利用の**有料**入館者は、**駐車場の割引**(1台1名)を受けられますので、**駐車券をお持ちの上**お越しください。

● 交通案内

独立行政法人国立美術館
京都国立近代美術館
The National Museum of Modern Art, Kyoto
〒606-8344　京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL. 075-761-4111
テレフォンサービス 075-761-9900
ホームページ　http://www.momak.go.jp